

第9回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「SHEEP SLEEP」

神奈川県 日本女子大学附属高等学校 2年 長谷川 礼奈



賢治のまちから
高校生★童話大賞

『SHEEP SLEEP』

神奈川県 日本女子大学附属高等学校 二年 長谷川礼奈

新しいルームメイトはひつじだった。

「どうぞよろしくお願ひ致します。」

そう言いながら丁寧に握手を求めてきたひつじの手は、子犬のように温かかった。

「こちらこそ。」

私はひつじの手をぎゅっと握り返した。ひつじの右手のひづめに、紺色の三日月の模様が描かれているのを見つけたのは、その時だった。ひつじは私の視線を感じてか、急に恥ずかしそうに両手を引っ込めた。

「普段は何をされているんですか？」

初対面の緊張を少しでも取り除こうと、私は積極的に話しかけた。ひつじはうつむき加減で、やさしい声で言つた。

「新宿のカフェで働いています。」

私は「すてき。」と素早く言つた。それは心からこぼれた言葉だった。ひつじはひどく緊張している様子で、私の言葉があまり耳に入つていよいようだった。

私はそんなひつじの姿を愛しく思つた。

私は数年前から、このアパートでルームシェアして暮らしている。ひつじがやつて来る前は音大生と暮らしていたのだが、彼女が夜な夜な弾くピアノの音にだけはどうしても馴染めず、お互い気まずくなつて、ある日突然、彼女はいなくなつた。

それは私にとつてショックなことだつた。彼女と暮らしていたときには、彼女のことを行うとうしく思つたりしたけれど、いざいなくなると私のすべてがすっからかんになつた感じがした。彼女が深夜に弾くピアノを、もう一度聴きたいとまで思つた。

彼女がいなくなつてから、私は全然眠れなくなつた。ピアノの音がなくなつた以上、何も私の睡眠を邪魔するものはない。にもかかわらず眠りは浅くなるばかりで、ついには全く寝付けずに朝になつてしまふこともザラになつた。どうやら私は眠るという行為を忘れてしまつたようだつた。





私の中から欠落した眠りは、そう簡単には戻つてこなかつた。本を読みあさつたり、通院したり、薬を飲んだり、運動したり、何を試してもだめだつた。

そんな矢先、ひつじがやつて來たのだ。

二人でリビングでお茶をした。ひつじが淹いてくれたハーブティーは、とても上品でおいしかつた。体の中が消毒されたかのような、すっきりとした気分になつた。

しばらくお互たがいの身の上話をして、ゆるい会話を続けていたら、ふいに沈黙が降つてきた。時計の秒針が正確に時を刻む音だけが二人の間に流れた。

「そろそろ、眠りましようか。」

ひつじは空氣を切るように、立ち上がつた。私も「うん」とうなずいて、立ち上がつた。

「よい夢を。」

ひつじは自然にそう言つて、部屋に入つて行つた。私はそれに感心して、ふふつと一人で笑つた。なんだか温かいスープを飲んだような気分になつた。

その夜も、案の定眠れなかつた。何度寝返りを打とうが、背伸びをしようが、私の体は眠つてくれそうになかつた。眠くなるどころかますます覚醒せいしていく氣がして、怖かつた。私は青白い部屋の壁を見つめながら、涙を流した。

眠れないのは、本当に怖いことなのだ。

数時間そのままでいたら、恐怖は諦めに変わつた。いつもそうだ。私は体をバサつと起こし、思い切つてリビングに行つた。もう今晚は寝なくていいや。そう自分に言い聞かせた。

リビングの電気を点けた時、私は思わず尻もちをついた。そこには、ひつじが座つていたのだ。それも放心状態といつた感じで、視線を床のどこか一点にぎゅつと集中させ、全身の力を抜いて、抜け殻のようになつていた。私はどうすればいいのかわからず、何も言えずに突つ立つていた。するとひつじはふと顔を上げた。



賢治のまちから 高校生☆童話大賞

「こんばんは。眠れませんか？」

ひつじの顔にはクマが出来ていた。

「ええ。ひつじも？」

私はひつじの隣に座った。ひつじはとても甘いいいにおいがした。

「はい。みなさん眠れない夜にはひつじを数えますよね？ ひつじは本来よく眠れる動物じゃなきやいけないんです。それなのに私は……」

ひつじは顔を伏せた。私はひつじから視線をそらした。

「ずっと眠れないの？」

私は壁に向けて声を発した。ひつじはうんとうなずいた。

「眠れないひつじは、もうひつじじゃないんです。私は群れから追放された身ですから。」

私は「ひどい」と、つぶやいた。ひつじは鼻をヒクヒク鳴らして、泣いているようだつた。

「でも眠れないのは仕方ないよねえ。」

私は慰めだが何だかよくわからないことを言つた。それは自分に向けて言つているようでもあつた。

「……旅に、出ませんか。」

ひつじは目をゴシゴシ拭きながら言つた。ひづめの三日月がゆらゆら揺れて見えた。

「旅？」

私はその響きの楽しさに、心がふわりと浮かぶのを感じた。

「さあ、行きましょう。」

ひつじは急に明るくなつて言つた。私はひつじに手を引かれるがまま、ひつじの部屋に入つて行つた。

「ちゃんとついてきて下さい。」

ひつじはそう言うと共に、全速力で走りだした。私は足がもつれそうになつた。ひつじはそのままの勢いで、開け放たれた小窓に突っ込んでいく。

「危ないっ！」

私は目をぎゅっと閉じた。速度はぐいぐい上がつていく。耳の横を風がヒュンヒュン通り過ぎていく。私の足は床を離れる。体が風に包まれる……氣づいた時には、私のまわりには一面の星が散らばつていた。私は茫然として、動けずにいた。

「おーい！」

ひつじが呼んでいる。私は無我夢中で走り出す。足元の無数の星に何度も



もつまずきながら、頭に当たりそうになる流れ星を的確に避けながら、走つた。

ようやくひつじのもとに着くと、ひつじは虫取り網で流れ星を捕つていた。ひつじが網を振るたびに、網の中に捕らわれた星々が目にもとまらぬ速さで発光した。

「これ、どうぞ。」

ひつじは笑顔で言う。手には、とれたての星がひとつ、乗せられていた。私はいぶかしげな顔で受け取る。それは氷のようにひんやりと冷たかった。

「おいしいよ。」

ひつじは星を食べはじめた。私もそれにならつて、星を口に運ぶ。

「甘い……」

私は星のとろけるような甘さに、思わず笑顔になつた。ひんやりシャリつとして、金平糖のように甘かつた。

ひつじは相変わらず笑顔で、網を振り回していた。私は流れ星をジャンプして捕まえたり、口で直接キヤツチしたり、足元の小さな星をたくさん拾い集めたりして、おなかいっぱい星を食べた。

「さあ、乗りますよう。」

星を頬張つていたら、ひつじに突然手を引かれ、気づくと雲の上にいた。雲の隙間から、街の明かりが煌々と光っているのがよく見えた。

「速い速い！」

私はすっかり興奮して、雲にしがみついた。地上の車はホタルのように小さく光つて見えた。

ひつじは雲を少しづつちぎつてポケットに入れていた。あとで毛糸にして、編み物をするつもりらしい。

雲はぐねぐね蛇行しながら、北へ向かっていた。急にカーブするので何度も振り落とされそうになつたけれど、そのたびに指先に力をこめて持ちこたえた。

「もうすぐ着きますよ。」

ひつじはさつそく、雲を細く延ばして毛糸を作りながら言つた。ひつじの背後にまんまるで大きな満月が見えてきた。

「さあ、降りましょ。」

ひつじは私の腕をぐいっと引つ張り、雲から飛び降りた。私は長い悲鳴を上げた。パジャマのズボンの裾から空気がたくさん入つて、ふわふわした。私達はものすごいスピードで落下していく。私は目をつぶり、ひつじにし



がみついた。

気がつくと私は真っ暗な湖の中にいた。あわてて呼吸しようとしたら、ひつじがにっこり笑って、「大丈夫」と言つた。私は呼吸をやめた。でも、全然苦しくない。

よくよくまわりを見渡すと真っ暗な中に、たまに通る小魚の大群の背が、月光できらりと光つてきれいに見えた。湖の中は音の無い世界だつた。ひつじに小突かれて上を見たら、水面に満月が揺らめいていた。私達以外に大きな波を立てるものがいないこの空間で、その揺らめきは私達の動きに直結していた。ひつじはなるべく波を立てないような泳ぎ方で、ぐいぐい上へあがつていく。私はひつじの右足首に右手を掛けて、体の力を抜き、ひっぱりあげてもらう。頬を、生温い水とキーンと冷たい水が、交互になでていく感じがした。

あと数メートルで水面の月にたどり着きそなところで、ひつじはグインと加速した。ひつじは本当に泳ぎが上手かつた。私は目をつぶり、ひつじに身をゆだねた。

体が軽くなつた感じがして目を開けると、私は月にいた。そこは見渡す限り、からし色をした、ふわふわした場所だつた。私はとつさにひつじを探す。ぐるっとまわりを見渡すと、右端のほうにひつじのつのが見えた。私は立ち上がり、走り出す。走るたびにやわらかい地面に足が食い込んで、とても走りにくかつた。

ひつじのもとへ着くと、ひつじは地面をちぎつて、むしやむしや食べていた。私は笑つた。

「何食べてんのよ。」

ひつじは無邪気に笑い、私にも地面をちぎつてわけてくれた。私はそれを口に運ぶ。

「……バナナケーキ！ おいしい！」

私は地面に伏せて、直接地面をかじつた。体全体がバナナになつたみたいに、バナナのにおいに包まれた。

私達は思う存分、一生分のバナナケーキを食べたんじやないかと思うほどにかく食べ続けた。そして、かけっこをしたり、でんぐりがえしをしたりした。トランポリンだつて出来た。

「楽しいね。」

私はひつじに言つた。楽しいなんて口に出したのは何年ぶりだろうか。ふと思つた。ひつじは「うん」と大きくうなづき、一番いい笑顔をした。



遊び疲れて寝ころんだまま星や惑星を見ていたら、体の奥のほうから、久々に感じる感覚が湧き上がってきた。

ふいにひつじのほうを見ると、どうやら私と同じことを感じているようだつた。

「……なんだか……眠くなってきた……」

私達は声を揃えて言つた。それとほぼ同時に、私達は眠りについた。深い深海に引き込まれていくような、不思議な眠りだつた。

目が覚めると、私はいつものベッドで、いつものパジャマを着て、いつものぬいぐるみを抱いていた。

反射的に体を起こし、なんだか胸の中が騒ぐので急いでひつじの部屋に行つたら、そこにひつじの姿は無かつた。そこにあつたのは、年を重ねた彫刻のような、鈍く光るひつじのツノだけだつた。

私はのどの奥がきゅつと締まるのを感じた。鼻がツンとして、いつの間にか涙がこぼれていた。私はそれを拭くのすら忘れ、ひつじを探した。でも、それは無駄なことだつた。

その晩、私はツノを抱きしめて眠つた。指先で撫でると、その小さな凹凸ひとつひとつが愛しくてたまらなかつた。ツノがひんやり冷たいのを感じると、ひつじの体温が恋しくなつた。私はだらだらと何時間も泣いた。涙腺が勝手にゆるんで、惰性で涙を流しているようだつた。

そのとき、部屋の中をすうつと大きな影が通り過ぎていくのを感じた。私はゆつくりと体を起こし、窓の外を見つめた。そこには少しだけ欠けた月が浮かんでいる。でも、何かおかしい。

私はよーく目を凝らして月を見つめた。すると、そこには駆けていく無数のひつじのシルエットが、右から左へ絶え間なく流れていた。きっと羊の群れが、秋へ向けて大移動しているんだろうと思つた。

私はツノをぎゅっと抱きしめる。きっと、あの中にひつじは戻れたのだろうと、安らかな気持ちになつた。

夜風はもう、ひんやり冷たくなつていた。



春になり、私は新しいルームメイトを迎えることになった。いつもより少しだけおめかしして、そのときを待つ。

チャイムが鳴った。私は「はあい」と明るく返事をして、ドアを開ける。そこには、きれいな茶色の巻き毛をした、かわいらしい女の子が立っていた。わたしはふふっと笑い、握手を求める。

「よろしくね。」

女の子は私の目をじっと見つめて、きゅっと笑う。

「よろしくお願ひします。」

そのとき、私は呼吸を止めた。女の子の右手の甲、ちょうど握手をするとよく見えるところに、それはあつた。

私は涙を止めることが出来なかつた。紺色の三日月。懐かしい形。

「……おかげり。」

私はうつむいたままそう言つて、彼女に抱きついた。髪の毛に鼻を寄せると、あの甘いにおいがした。